

黎明紙第3号御研鑽

明主様の御救いについて（その2）

淨靈について（上）

明主様の御教えが『**主神 直接の啓示**』によるものであり、今まで何人もが説き得なかつた来るべき『**新文明構想の指針**』を示されたものであることは、先号で申し上げた通りであります。

主神の御目的が、人類待望の天国世界、病貧争絶無の真善美の世界の建設におありになることは 言うまでもないことであります。この素晴らしい世界をお創りになるために、それ相応の準備、つまり精神物質とともに右の世界を形成するに足るだけの条件を揃えられる必要がおありになつたわけであります。処が、神様は、その準備として、

非常に歳月をようする物質面を先にされたわけであります。

しかし、最早時期来つて『物質文化は予定の線にまで発達した今日、ここに神は唯心文化を一挙に飛躍させ、両々相俟つて眞の文明世界を創造』されることになつたのであります。ここで、最も根本的、且つ困難な問題は、長い間眠つていた有神思想を呼び覚ますことでありましょう。

神様は物質文化を進歩発達させるために、神様の実在を無視させ、私共の想念を物質面に向けてこられました。そのため、世の中の人々の大半は唯物科学に魂を奪われ、その影響を実際に強く受けて來て居ります。科学の分野の人々は勿論のことですが、宗教の分野の人々でさえも近頃はその傾向が著しくなつてきていると申しても過言ではな

いと思います。例えば唯物科学が『科学の分野にあらざる人間生命の問題にまで立入つて』しまつても、それに疑問をもつ人はほとんどない現状であります。

この様に、唯物科学に支配されてきた現代の人々に、神様の実在を認識させ、

更に神様の御心を掴ませることは、世界中の人々が救われるため、最も根本的なことであり、しかも至難の業とも言えるのであります。

その方法として、科学では不可能なことは科学の本質から言つても、また科学に与えられている使命から言つても明白な事であるとります。宗教の分野では、現在までの多くの宗教が、教義や戒律を主としてきた訳でありますが、この方法だけでは困難が伴うことは、現在の宗教の状

態を見ればよく分るのであります。勿論、今までの多くの立派な宗教によつて神様の御心を分らせて いただいた人々もたくさん居られます。

幾多の苦難にあい、血の滲むような暴虐にたえつつ教えを弘通してこられた努力は筆舌につくせぬものがあり、それによつてこの世の中が、悪に支配されたまま滅びてしまうのを、

くいとめられてきたことも忘れてはならないと思ひます。

しかし、教義や戒律による方法で、現在の唯物科学・無神思想に支配されて来た人々に、神様の実在を認識させることができいかに困難であるかを認めないわけにはいかないのであります。

ここに私共は『淨靈』『奇蹟』のもつ重大な意義を見出すのであります。

『何しろ文化民族の大半は科学に魂を奪われ、神を無視して来た今日、この魂を揺り動かすとしたら、實に驚異的超人力によらねばならないからで、これによつて神の実在は確認されるのである、

その方法としては奇蹟より外はないので、本教に奇蹟の多いのもその為である・勿論この力こそ主神から伝達される絶対力であるから、如何なる無神主義者と雖も、有神思想に転向するのは勿論であつて、ここに精神文化興隆時代に入るのである。その結果、跛行的文化は是正され、眞の文明世界実現と共に、人類の最大苦惱である病氣、貧乏、争いの三大災厄は根本的に解決されるのであって、その為選ばれたのが

私であつて、このことは今改めて言うのではない、昔から幾多の聖者賢哲が予言された処であり、只その時期が到来したまでである』（『救世教とは何ぞや』）『茲に到つては最早文化の進歩に対し、一大転換が行われなければならぬ天の時となつたのである。

其第一歩として、無とされていた一の靈界の存在を普く人類に明示される事となつた。といつても無の存在である以上、其の方法たるや、科学では無論不可能である。そこで未だ曾て人類の経験にない程の偉大なる力の發揮である。即ち神の力である。処が長い間唯物主觀に固まつていた現代人であるから、納得させるには非常な困難が伴うのであるが、之に対し本教が行う唯一の方法としての奇蹟がある。即ち本教の淨靈法こそそれである。之によつて如何なる無神論者と

雖も、一挙に承服せずには措かないからである。従つて此事が普く人類社会に知れ亘るに於いては、世界共通の真文明が生れんとして、現代文化は百八十度の転換を、余儀なくされるであろう。』（采111）と、明主様はお説き下さつて居ります。

更に、『宗教と奇蹟は切つても切れない関係にある事は、昔から幾多の文献によつても明らかである。もし奇蹟のない宗教でありとすれば、それは最早宗教とは言われない。何となれば奇蹟は神が作るのであつて、人間の力では一個の奇蹟も作られ得ないからである。故に奇蹟のない宗教は宗教としての存在価値はない訳である。ただ形式だけが如何に宗教的であつても、それは宗教的価値を喪失していると言つてもいい。

以上の意味において、偉大なる宗教程奇蹟が多く顯れる事は当然である。奇蹟とは、換言すれば予期もしなかつた利益が現れる事である。それによつて衷心から信仰心が湧起し入信し不幸から救われる。これが眞の宗教でなくて何であろう。（中略）人文史上、本教位奇蹟の多い宗教はまだ見聞した事はあるまい。

この意味において世界の大転換期に当つて、唯心的魂を喪失した世界に対し奇蹟の息吹きによつて、眠れる魂を揺り動かすのが本教の目的である。

万能の神は、觀世音菩薩又の御名光明如來の御手を通じて、自由無碍なる御活力を駆使し、多々益々奇蹟を示し給い、本教を機關として、救世の大業を行わせ給いつつあるのである』（巻12）と、仰しゃつて居られます。

今までの宗教にも多くの奇蹟があつたことは事実であり、私共は、キリストを始め多くの偉大な聖者達によつてあらわされた奇蹟のことを知つて居ります。また、フランスの町ルールドに於ける奇蹟、或いはかの数学者で物理学者であるパスカルに彼の著述「パンセ」を書かしめた動機が、

姪の眼病がキリストの荊の冠の一部と信じられていた聖荊に触れることによつて全快した奇蹟によるという話は有名であります。

しかし、これらの奇蹟が、一宗の教祖、聖者と言われるような特別な人々によつてあらわされたり、或は特定の場所であらわされたもの、已に神様に対する熱烈なる信仰をもつている人々による場合等、かなり特殊な条件のもとで

あらわされていいることも事実でありましょう。つまり、大部分の人々が、無神思想に強く支配されている現在の世の中で、

神様の実在を認識させ、神様の御心を知らせることが、いかに困難なことであるかが分るのであります。

これは、今までの宗教と唯物科学との間に横たわる本質的な相違によるものと申してもよいのではないかと思します。この問題を解決するために、宗教、科学夫々の分野の方々が真剣に努力してこられたわけですが、中々解決のいと口を見出すことは出来ないようあります。ここに、天の時来たつて、主神は、明主様を通して、その絶対

力を發揮され、来たるべき新文明世界の指針としての真理の探奥を説きあかされたのであります。

先号で申し上げましたように、明主様は、今まで。私共が宗教と科学とを別々のものとして扱つて来た事。この考え方こそ大きな誤りであつたと指摘されました。

更に、『精神に偏らず物質にも偏らない両々一致した中正的新しい文化形態であり、それによつてのみ天国は実現するのである』（『本教の誕生』）『経に偏せず緯に偏せずして、経であり緯でもある処の融通無碍の、いわば中庸的考え方の真理を説くのである。（中略）この原理の表われとしての淨靈法』（地31）とお説きいただいて居ります。ここに、淨靈による奇蹟と今日までの宗教による奇蹟との間に

本質的な違いを見出させていただけるのではないかと思ひます。先号でも、申しましたように、淨靈は宗教と科学以上の真理の表われであつて、而も科学との接觸点をも兼ね備えて居り、唯物分野の人々でさえその力にふれさせていただき、神様の実在を認識出来る可能性をもつてゐるわけであります。

即ち、

(1) 誰にでも実行出来ること。 『選ばれたる特殊人に一般は思うであろうが。決してそうではない。如何なる人間といえどもこの方法を学ぶ事によつて頗る簡単に実行し得らるるのである』 (地4)

(2) 修業が要らないこと。『修業は要らないです。た
だ、三日とか五日一教修という、話を聞くだけで御守りをか
けたら治るんです』(栄164)

(3) 疑つていてもよいこと。『最初から神を否定し、
何程疑つても必ず奇蹟が起るのである。(中略) 疑ぐり披い
ても効果に変りはない』(「奇蹟とは何ぞや」) 右の三つ
の御教えからも、私共は淨靈が宗教と科学以上の真理の表
われであり、

無神思想の人々をも救わんとされる神様の大愛の発露であ
ることが分らせていただけるのであります。

この神様の御心に私共が甘えてしまい、この段階以上に
「淨靈」のもつ意義をつかましていただく努力を怠り、私

共にこの御力のお取次ぎをお許し下さった神様の御心にお応えする努力もせず、単なる病氣治しか、一種の精神療法程度にしか理解しないという様なことは厳につつしまなくてはならないのは勿論であります。

次号では、この科学との接觸点より出発して、宗教と科学以上の真理の表われとしての淨靈について、更に皆様と共に考えさせていただきたいと思つて居ります。

誰でもがお取次ぎさせていただけるのが淨靈であります
が、もし、「明主様に対する信仰」「御教えに基づく信
仰」が確立せずして、自己流に淨靈を考えるようになつた
時には、ここに重大な危険を生ずることを私共は、しつか

りとつかませていただきていなければならぬと思いま
す。